

幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

2004

9



21世紀保育ブックス

最新刊

編集委員 森上 史朗 (子どもと保育総合研究所代表)
柴崎 正行 (大妻女子大学教授)
柏女 霊峰 (淑徳大学教授)

これからの保育はどの方向へと向かっていくのか。新しい21世紀の保育を展望しながら必要とされる諸問題を根本的に掘り起こし、確実に保育者を導き育て、将来の保育への指針を与えるシリーズ！

21世紀保育ブックス⑩

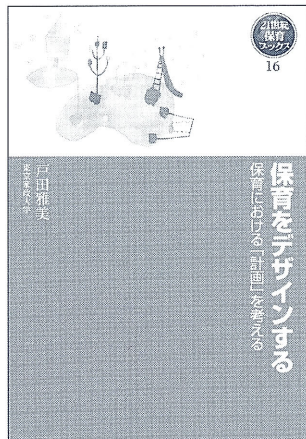
保育をデザインする 保育における「計画」を考える

戸田雅美 (東京家政大学) 著

「保育の計画」とは、一人ひとりの子どもの思いを実現しながら、その育ちも保障されていくように、また、子どもと保育者が一緒に創り出す遊びや生活の全体が豊かになるように、保育を「デザイン」していくことです。保育者がどんなふうを考えながら、保育を計画しているのか。そしてそれはどのように表現されているのか、もしくは「デザイン」されているのかについて、さまざまな事例を読み解いていくという方法で考えていきます。だれもが悩んでいる「保育計画」の考え方・書き方を詳述。保育者必携の書です。

【目次から】

- 第1章 保育はオーダーメイドデザイン
- 第2章 指導案に見る保育のデザイン
- 第3章 環境に見る保育のデザイン
- 第4章 保育における「計画」～種類の違いをどう生かすか～



B6判 144頁 定価1,260円(税込)

既刊本

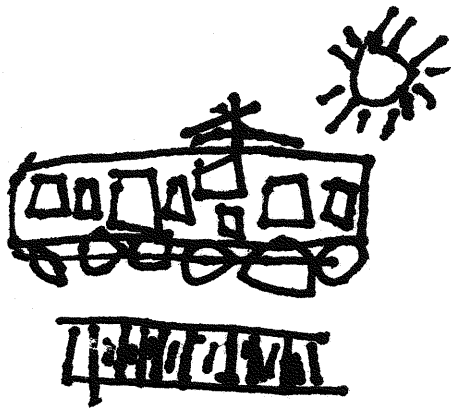
- | | |
|------------------------|---------------------|
| ①新しい教育要領・保育指針のすべて | 森上史朗 著 |
| ②新時代の保育サービス | 柏女霊峰・山本真実 共著 |
| ③カウンセリングマインドの探究 | 柴崎正行・田代和美 共著 |
| ④子ども虐待の理解と対応 | 庄司順一 著 |
| ⑤知的好奇心を育てる保育 | 無藤 隆 著 |
| ⑥保育者の「出番」を考える | 吉村真理子 著 |
| ⑦地方自治体の保育への取り組み | 山本真実・尾木まり 共著 |
| ⑧乳幼児期の「心の教育」を考える | 阿部和子 著 |
| ⑨自由保育とは何か | 立川多恵子・上垣内伸子・浜口順子 共著 |
| ⑩保育者が出会う発達問題 | 大場幸夫・前原 寛 共著 |
| ⑪保護者の要望をどう受けとめるか | 小笠原文孝 著 |
| ⑫保育所と幼稚園～統合の試みを探る | 吉田正幸 著 |
| ⑬子どもの健康を考える | 巷野悟郎 著 |
| ⑭「わたしの世界」から「わたしたちの世界」へ | 今井和子・神長美津子 共著 |
| ⑮21世紀の子育て支援・家庭支援 | 伊志嶺美津子・新澤誠治 共著 |

以下続刊

キンダーブックの **フレーベル館**

幼児の教育

第103巻 第9号

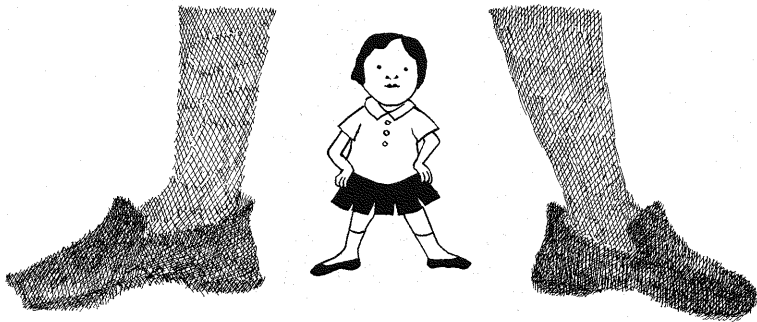


幼児の教育 目次

— 第一〇三卷 第九号 —

© 2004
日本幼稚園協会

「雑」を見直す	浜口 順子	(4)
子どもと出会う(9) ヒトの子育て	岩田 純一	(7)
劇を見る子どもたち―子どもたちは変わったか―	小林 美実	(16)
子どもの理解を深めるために ―メラニー・クラインの著書を読んで―	清原 規子	(24)
葉っぱの力(2)	群馬 直美	(29)



退職園長による子育て塾(5) ふるさと感……………戎 喜久恵…(36)

思い出を物語る、語りなおす

—TATの物語とその変化の意味—……………藤田 宗和…(44)

障害をもつ幼児の保育(25)—この子と出会ったとき—

水が大好きな子の『お魚物語』……………津守 真・津守 房江…(51)

話したくなるとき……………渡邊 満美…(56)

はれ!ときどき…その⑥……………さとうひろこ…(63)

表紙絵／藤原ヒロコ

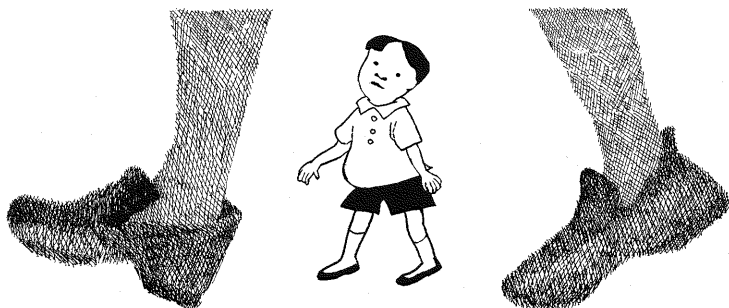
扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ「散歩日和」

編集委員／浜口 順子・田代 和美・佐藤 寛子・吉岡 晶子・仲 明子

編集部／河合 聡子






「雑」を見直す

浜口 順子

大学という職場で、同僚と「雑談」することの大切さを痛感する。あるテーマをもって話し合おうと集まるうちに、「そういえば……」と関連した事柄へ話題が転じ、そうして話のそれた先でまた花が咲くという展開。それが、ただ会議を冗長なものにし、当初のテーマに関する必要な対処をいたずらに先送りしてしまう場合はたしかに問題であろう。しかし、テーマしたいが現実には即していなかったり、テーマにまつわる事柄でメンバー間に十分なコンセンサスができていなかったりする場合などに、「そういえば……」による話題の多元化が、当初想定されていなかった展開を生む可能性がある。たとえば、メン



バーそれぞれにいろいろな周辺的問題を意識させ、日ごろから感じている不安や疑問を共有したり、同僚間の求心性を呼んだりする場合が多いのである。

道ではったり出会った知り合いなどと交わす、時節・天候の話、知己の近況、世間を賑わす事柄に関する感想……などの他愛のない会話も雑談といわれるものであるが、このような雑談を交わす関係には、心性の共有が伴う。また病院の待合室や乗り物に居合わせ、まったく初対面の人同士が雑談を交わしていることがあるが、そこにも、退屈や不安を紛らせようとする「場」から生ずる心性の共有がある。このような雑談をしている人を見ると、一般に高齢の方が多い。高齢者に話しかけられて、あからさまにいやな顔をした人、イヤホーンに集中したりしている若者とのコントラストも珍しくない。そんな光景を見ると、(生涯) 発達段階的な差もあろうが、雑談を交わすような人間関係——いろいろな人と他愛ない話をするというような関係、もしくは「地域」的な関係——をより多く経験してきたいる世代と、そうでない世代との落差をつよく感ずる。話の内容はともかく、人と言葉を交わすという行為じたいによって自己存在を調整するという智慧を、会得する機会を逸して生きている人が増えているのかもしれない。

「雑談」というと、高尚な談話(というようなものがあるかわからないが)よりも低い価値しかないもので、高次の話題の間をつなぐものでしかないような印象がある。しかし、その「つなぐ」機能についてもっと評価されていいのではないか。従来中心だと考えら



れている話題の隙間に浸透して、「中心性」じたいの如何を問う相対的な視点を用意するという意味でも、また話に参加する人同士の関係性をつなぐという意味においてもである。

雑学、雑多、雑役、雑感、雑念、雑踏、雑草、雑駁、雑菌、雑居、雑音……「雑（ザツ）」というはき捨てるような音や文字には、投げ遣りな注意、十把一絡げという扱いを受けた痕跡がある。「雑」という漢字の成り立ちからいうと、「いろいろな布を集めて作った衣服」の意があり、いろいろなものが混じる様子を表すようだ（雑木林、雑炊、雑巾などゾウと読む熟語もあるが、ザツに比べて蔑視的な印象は薄いのではないか）。種々さまざまなものが交じり合うことは、「不純」という軽蔑の意味づけに直結しがちであることを思い起こし、「雑」の意義を問い直したい。

日本における「雑誌」の嚆矢は一八六七年柳川春三による『西洋雑誌』であった（本田和子「雑誌の運命―『幼児の教育』創刊一〇〇年記念に寄せて―」二〇〇一年）。この『幼児の教育』という雑誌が、保育をめぐる中心的な問題が何処にあるのかを読む人それぞれの中に浮上させるきっかけとなり、またそれによって読者間のゆるやかなつながりを育むような、そんな「雑談」の場になればいいと思う。今号から本誌の編集に微力ながら携わらせていただく者として、そのような夢を持ち続けていきたい。

（十文字学園女子大学・お茶の水女子大学）

子どもと出会う(9)

ヒトの子育て

岩田 純一

親はじぶんの子育てに自信がもてず悩むことが多い。そのあげく、「ああしておけばよかった」「こうすればよかった」と、過去形でじぶんの子育てを自虐的に悔やむことが常である。このように我が子の子育てに悩み、じぶんの子育てを悔恨するのはヒトの親だけであろう。親は、そのような子育てへの不安から、子育て書や専門家のアドバイスを指針を求めようとする。そのなかには、しばしばヒト以外の

動物の子育てから学ぶべきであるといった調子のものである。しかし、動物の子育てが感動的ではあっても、やはりそれをヒトの子育てに単純にあてはめるには疑問を感じる。ヒトの子育ては、もっと複雑な背景の上に成り立っているからである。

人はしばしば学習する動物であるといわれ、子どもが一人前(大人)になるには多くの社会―文化的な技能や知識を学ばねばならない。それには、気の

遠くなるほど養育の時間を必要とし、そのための意図的な教育さえ必要になったのである。さらに複雑なことに、どのような大人になってほしいかという期待や理想、すなわち一人前になる目標が社会によっても、また時代によっても異なるのである。ここでは、多様な目標に向かって多様な子育てへの選択可能性に開かれている。それが本能的な動物の子育て行動とは違ふところである。だからこそ、子育ての違いが子どもの育ち方にも影響をもってくるのである。そこにヒトの子育ての難しさや、それをめぐる悩みが出現してくるにもなるのである。

チンパンジーにみる子育て

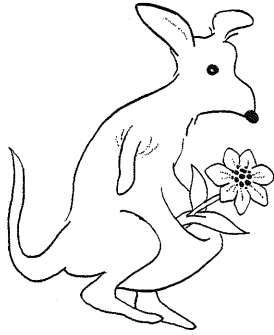
いかに素晴らしく感動的にみえても、ヒト以外の動物の子育てをそのまま手本にするというのは無理があるように思える。しかし、人間にもっとも近いとされるチンパンジーの子育てはいかがであろう

か。系統発生的にみると、チンパンジーとヒトの関係は、チンパンジーとサルよりも近縁であり、遺伝子配列も九十九・八パーセントまでヒトと同じであるという。それは、サルは尻尾があるがヒトとチンパンジーは尻尾をもっていないことにもうかがえる。また、ヒトの他に白目の部分をもっているのはチンパンジーだけであり、チンパンジーも視線の動きを手がかりに相手が見ているものを検出する能力をもっている。さらにチンパンジーには、道具の使用や製作という知的能力がみられ、葉っぱを使って水を飲む、蟻を釣る、石の台に種をのせそれを石で割ってなかの実を食べるといった野生での観察もなされている。

松沢（二〇〇二）は、チンパンジーの道具使用の知識や技術がどのように世代間で伝播されるかを、有名なアイとその子どものアユムを中心に組織的・追跡的に観察した著書を出版している。もっともヒ

トに近縁であるがゆえに、チンパンジーの子育てはヒトの子育てにとってヒントになるようにも思われる。松沢はその本のなかでチンパンジー流の育児・教育法を繰り返し述べている。それはつぎのような三つの要点にまとめられるだろう。

- 1 親は行動の手本を示すが、教え込もうとはしない。
- 2 「親と同じことをしたい」という本来的な動機づけがあり、親は子どもがすることを見守る。
- 3 子どもの働きかけに「親がきわめて寛容」であ



り、親はその本来的な動機づけに基づき子どもの行動を許容する。

親が手本を示し、子どもはそれを長い間、見続ける。子どもの側に親をまねたいという強烈な動機づけがあり、それを親は寛容に受け止め、子どもの行動をつねに見守る。本来的な好奇心に基づく子どもの冒険をとめたりはしないのである。それがチンパンジー流教育の要点なのである。そこには、子どもを「叱らない」「邪険にしない」「無視しない」という関係の基盤がある。このような親密な絆のなかで、子どもは親やまわりの仲間を手本としながら、じぶん流のやり方で自発的にまねながら学んでいくことになるのである。その際、ヒトの親のように「ああしなさい・こうしなさい」とは振舞わない、「こうしたほうがよい」という助言もない、「よくできた、すばらしい」とほめることもない。親はあ

くまでちゃんとやってみせ、お手本を示すだけであり、子どもが自発的に学ぶ様子をつねに見守っているだけなのである。

たしかにこのような教育法はヒトの子育てにも参考になりそうである。しかしながら、やはりヒトにチンパンジー流の子育てをそのままあてはめることは難しいように思える。ヒトにはヒトの特殊性があり、それを無視してしまうことはできないからである。ヒトが一人前になるには、チンパンジーとは比べものにならないほど膨大に蓄積されてきた文化——歴史的な価値や知識・技能をより体系的に継承していかねばならない。だからこそ、それを果たすには「ああしなさい・こうしなさい」と子どもに指示を与え、「こうしたほうがよい」といった助言を行い、「よくできたね、すばらしい」とほめるといった言語行為が、ヒトの子育てにおいては有効な方法になってくるのである。ヒトの子育てには、大人から

手や口を出すことが必要になったのである。また子どもの側も、大人から是認されることがその学びの促しや、さらに自己肯定感や有能感の形成にとって必要なものとなったのである。したがって、子どもをほめるのもヒトだけであるが、ほめられて喜ぶのもまたヒトの子どもだけなのである。ましてや、子どもをけなし、ときに他児と比較するのもヒトの子育てにおいてだけである。

子どもを「育てる」

チンパンジーとは違ってヒトの子育てにあっては、親が子どもの行動をコントロール（統制）するのである。ことばを手に入れたヒトは、ことばを介して子どもに手を出し、口を出すのである。たしかにヒトの子育てにあっては、行動の仕方をしつける、情況に適切な行動を教える、行動への動機づけを高める。うまくできたときはほめるといった意図

的なコントロールが、多くのことがらを学ばねばならない子どもには有効な方略である。しかしながら、ことはそれほど単純ではない。ときに、それが子どもの育ちにとつてネガティブな働きをすることにもなってしまうからである。ヒトの子育ての複雑なところである。

たとえば指示を与えるという形で保育者のコントロールが強く、それが常態化すると、いちいち指示を与えないと動かない・動けない子どもを作ってしまう。いわゆる指示待ちといわれる子どもたちである。子どもが自発的に工夫するより先に、いつも親切な助言ばかりを与え過ぎると、じぶんで考えるより代わりにやってくれるのをたよる子どもを作ってしまうことになる。また、言うことを聞かせる手段としてほめてばかりいると、ほめられないと行動しない子どもを作ってしまうことにもなる。すなわち、子どもへの過度なコントロールは、他方におい

て子どもの主体性や自発性を損なってしまう危険性を裏腹にもっているのである。保育者が熱心に手や口を出すほど、子どもの主体性が育たないといった結果にもなる。だからといって、手や口をまったく出さない勝手気ままな自由放任でも、子どもから社会的な自己の制御能力は育つてこないのである。そこがヒトの子育てにおける塩梅の難しいところなのである。

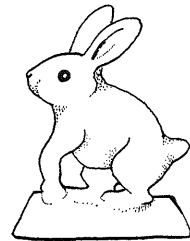
心理的な研究から

まずレップーたち(一九七三)による動機づけに関する研究をみてみよう。まず、自由遊びの場面で絵を描くのが同じくらい好きな幼稚園児が選ばれ、そのあと一人ずつ実験室によれば、絵を描くように求められるが、その際に子どもたちはつぎの三群に分けられる。第I群は上手に絵が描けたらほうびの賞品が貰えると約束され、終了後に賞品が与え

られる（予期あり賞群）、第Ⅱ群は賞品の約束はなく、実際に賞品は与えられない（賞なし群）、第Ⅲ群は賞品の約束はなかったが、終了後、予期しない賞品が与えられる（予期なし賞群）、といった群である。たしかに実験室ではⅠ群が賞品を貰うために他の群よりも多くの絵を描くのがみられる。その一週間後の自由遊び時間に再び絵を描くのにどれくらいの時間を使ったかが調べられた。すると興味深い結果がえられたのである。ほうびが貰えない自由遊びの時間では、第Ⅰ群は以前のように絵を描くことに自発的な興味を示さなくなつたのである。しかしながら他の群では、絵を描くことに費やす時間が以前とほとんど変わらなかつたのである。この結果は何を示しているのであろうか。もともと絵を描くのが好きであつたのに、なまじ絵を描くとほうびが貰えたことによつて、じぶんはほうびを貰うために絵を描くといった自己の行為の認識にすり替わつてし

まつたのである。その結果、あれほど絵を描くのが好きであつたのに、ほうびが貰えないと自発的には描こうとしなくなつてしまつたのである。これは、ほうびで絵を描かせるという外からのコントロールが、結果として本来的に好きで絵を描こうとする気持ちを奪つてしまうことになつたのである。知恵の輪パズルがとけたらほうびを与えるといった人為的な動機づけによつて、チンパンジーさえもパズルをとくことそのものへの元来の好奇心を失つてしまつたという研究報告もみられる。

もうひとつの例は、セリグマンら（一九六七）に



よる学習性無力感の研究である。ハンモックに固定された犬に電気ショックが与えられるが、それらの犬は二つの条件群のもとにおかれた。第一群の犬は、顔の両側のパネルを顔で押すと電気ショックが停止する逃避可能群であり、第二群はパネルを押しでも電気ショックをじぶんでは停止できない逃避不可能群である。じつはこのような経験の違いが、のちの新たな場面における学習行動に影響を与えたのである。犬は肩の高さくらいの障壁で半分に仕切られている回避訓練箱に入れられる。その部屋の床からは電気ショックがやってくるが、障壁を飛び越えて他方の部屋へ行けばショックを避けることができる。電気ショックがくる合図として天井のランプが点灯され、点灯して五秒以内に障壁を飛び越せば、ショックを受けなくてすむのである。すると、逃避可能群の犬はすぐにショックから逃避・回避することを学習したが、逃避不可能群の犬は、ランプが点

灯して五秒後に電気ショックがきてもじつと隅のほうにうずくまったままで動こうとはしなかったという。犬にとつてはかんたんに学習できる状況にもかかわらず、あたかもじぶんは何をしても無駄であるといわんばかりに、電気ショックから逃れる試みは何もしようとしないのである。

この研究は何を物語っているのだろうか。逃避不可能群の犬はじぶんがいかに工夫しても、じぶんの行動と無関係に電気ショックがやってくる。じぶんがいくら努力しても、その状況を変えることができないと知ったとき、犬は絶望感や無力感を学習してしまったのである。すると、じぶんの能力で解決できる課題状況にあつても、最初から試みることをあきらめてしまうのである。それは、「ぼくは何をしてもだめだ」「努力しても何も変わらない」といった、自己無力感に陥り、じぶんで何も努力しようとはしなくなってしまう子どもの姿と重なり合

う。セリグマンは、この無力感の学習 (learned helplessness) が金魚からヒトまで同じようにみられるという。

これらの研究を子育ての状況にひきよせて考えてみよう。もし子どもが自発的に何かをしようとしても、いつも親が子どもの意志とは関係なく親の言う通りにさせてしまうといった関係状況を想定してみよう。そこでは、じぶん自身では状況をコントロールすることができず、結局は子どもが外界(保育者)からの一方的な力にじぶんを委ねてしまうことになる。まさに先の犬と類似の経験を味わうことになるのではなからうか。それは、じぶんから外界に働きかけようとする子どもの能動性・自発性を削いでしまうことにもなったり、何事にもじぶんからは動こうとしない、無気力で受動的な子どもにさせてしまう危険性を示唆しているように思われる。

ヒトの子育ての難しさ

ヒトの子育てにおいて、ほめる・叱るとか指示や教示を与えるといった働きかけは重要である。しかしながら、それがあまりにも一方的過ぎると、子どもの自発的な意欲や主体性の育ちを奪っていく危うさをかかえている。いつも受動的に与えられ・させられるという感覚ばかりで、じぶんが主体的にスルという感覚が育ってこないのである。その意味で、子どもの自発性を尊重し、黙って見守るという待ちの保育も重要なのである。しかし、子どもの自発性を黙って待つ、黙って見守ることがいかに難しいかはしばしば保育者の経験するところである。ついつい、見るにみかねて子どもに手や口を出してしまうのが常である。しかし、黙って待つ保育もへたをすると自由放任になってしまい、結果として自由気まま、じぶん勝手な子どもを育ててしまう危うさも

かかえている。やはりそこでは、子どもの行動を適切に方向づけ、しつけ（型付け）ていくという保育者による適切なコントロールが必要になってくるのである。

ヒトの子育ては、このようなスルとサセルの両義的なバランス・兼ね合いの上に成り立っている。ほどよい兼ね合いは、一人一人が異なる個性や気質をもった子どもと保育者の微妙な関係によっても違ってくるであろう。そこに、ヒトの子育ての一筋縄ではないかない難しさがあるように思われる。ある子どもでもうまくいっても、別の子どもではうまくいかないといったことも生じてしまうのである。教育（education）という語源には二つの意味が内包されている。ひとつは、訓練する・教え込む・調教するといったニュアンスである。まさに外からのコントロールである。他方は、引き出すという意義である。これは子どもの能動的・主体的な力を引き出す

という教育の姿勢を意味するものである。ヒトの子育てや教育は、この相反する危うい両義的なバランスの上に成り立っているのである。

（京都教育大学）

参考文献

- Lepper, M. R., Greene, D. & Nisbett, R. E. 1973
Understanding children's intrinsic interest with extrinsic reward: A test of the over justification hypothesis,
Journal of Personality and Social Psychology, 28, 129—137.
- 松沢俊郎 『進化の隣人 ヒトとチンパンジー』岩波書店
二〇〇二年
- Seligman, M. E. P. & Maier, S. F. 1967 Failure to escape
traumatic shock, *Journal of Experimental
Psychology*, 74, 1-9.

劇を見る子どもたち

—子どもたちは変わったか—

小林 美実

三十年前、私は同じ短大に勤める児童文化担当
教員や保育者たちと人形劇団を結成した。子ども
が好きで人形劇が好きな者の集まりだった。当時
は子どもの数も多く、保育現場にも活気があつ
た。毎週土曜日の夜集まり、人形を作り練習す
る。休日には荷物をかついで公演に出かける。そ
うして三十年がたった。

今、人形劇団は「劇団」になった。人形劇は幼

児のための大事な演目として必ず演じているが、
それに「劇あそび」に近い「参加劇」や「リー
ダース・シアター」等が加わり、一層保育者集団
らしい特色ある劇団になった。公演にも、メン
バーの車、遠距離の場合は宅配便やレンタカー等
機動力を駆使する様になり、公演場所も立派に
なった。音響設備が整い、暖房は勿論、冷房も入
る。快適な所で公演することが多くなった。物的

に豊かに、便利に楽になり、かわりに私たちの体力が落ちた様に思う。

ところでよく質問される。「劇を見に来る子どもたちも、ずい分変わったでしょうね」。私たちの公演場所は、学校や幼稚園・保育園以外が多い。児童館、児童センター、社会教育や福祉などの施設、集会場などである。皆さん、学校や園の外、つまり「先生」のいない所での子どもの様子に興味があるのだろうか。

しかし今の子どもたちは、放課後や降園後でも自由に遊びまわれない。自由にかけてまれる広い空間も無いし、年齢を越えて遊ぶ「あそび集団」も街中から消えた。周りの大人が子どものやることを決めている。親の都合や考えが優先している。劇を見に来るのも親が決めること。特に幼児は大人がつきそって来るから当然だろうが、小学生も親の指示に従っている。会場には「先生」は



▲人形劇を見る子どもたち（昭和61年 静岡県 児童館）

いないけれど、大人たちの囲いの中に子どもたちはいるのだ。最近の子どもをねらう犯罪の増加は、この様な囲いを一層強いものにしてしまった。大人の囲いは、良くも悪しくも必要な時代なのだ。

会場に来る子どもたちはどう変わったのだろうか。子どもだけが変わったのだろうか。

生まれてはじめて人形劇を見る子ども

母親に連れられて、一歳前後の小さい子どもたちが会場にやって来る。親の膝の上に座って少し不安気になっている。親にしがみついている子どももいる。この場所も、これから目にもすることも、子どもたちにとってすべてが初めてなのだ。劇が始まり、人形がけこみの上に出る。それをおどろいた様な表情で、じっと見つめる。その人形が動き出し、しゃべり出すと、それだけでびっくりして泣

き出す子もいる。こわい狼や鬼が出ようものなら、何人もがつかれて泣いてしまう。大人たちはそれを面白がって笑うけれど、子どもにとっては大変な出来事なのだ。それもおさまって、またじっと人形に見入っている。楽しい音楽がきこえてくると、体をびよんびよん動かしたりする。劇が終ると、フッとため息をついたり、急に周りを見まわしたり、親に強く抱きついたり。目の前で動きしゃべる人形との出会いによって、まだストリーリーのわからない小さい子どもの体の奥に、何か不思議なことが起きた様に感じる。ごく幼い子どもの、初めて人形劇を見る様子は、今も変わっていない。

劇を見る子どもたちは、変わったか

約三十年前、すでに「子ども劇場」が全国に活動を広げていた。青山の「子どもの城」をはじ



▲参加劇「魔法の笛」でいっしょに演じる子どもたち（平成7年 茨城県 児童館）

め、子どものための文化施設が各地に建設され始めていた。しかし公演して歩いてみると、東京都内でも、生の劇をあまり見る機会のない子どもが沢山いた。但し、テレビは皆が見ていた。ドリフターズは大人気だし、今も人気の「ドラえもん」も始まった。

その頃の子どもたちは、あそび仲間や兄弟姉妹で群れてドヤドヤやって来た。興奮ぎみで、静かに座っていない。子ども席は原則として舞台のすぐ前の床の上だ。その広い場所が嬉しくて、さっそくねころがる、ふざけあう、走りまわる。何にでも興味があって、幕や照明器具をさわりにくる。時には喧嘩も始まる。幼児も小学生の後について、まねて走りまわる。とてもじっとしてられないのだ。しかし劇が始まると、不思議におちついて見入ってくるのがわかる。表情も豊かに、まじめな顔や笑う顔、その反応のよさに、演じる

方も力が入る。しかし面白くない、飽きた、となると大変。しゃべり出し動き出す。テレビの流行のせりふや動作をまねてふざける。面白そう、と感じると、また真剣に見始める。劇を見終ると、また友だちと群れて元気に帰っていく。次のあそび場所に行くのだろう。

今、子どもたちはおとなしい。劇を見る機会が増えて、この様な場所に慣れた、ということではないと思う。あそび仲間と大勢連れだつて来ることは少ない。一見、行儀良く見える。参加劇と一緒に劇をして楽しそうであっても、その表し方が弱く、ぼんやり、うじうじと表す。自分の気持ちや思いを表すことに自信が無いように見える。中には元気にとび出して劇に参加し、「ヤッター！」と強い喜びの気持ちをつばいの笑顔や動作に表して席に戻る子どももいるが、少数派だ。この連中が一番劇をくい入る様に見ていることが面白



▲参加劇「ジャングル族の村祭」 つくった槍を村人にプレゼントする子どもたち（平成8年 沖縄県）

い。今でもこの様な子どもにはあそび友だちが何人もいる。一緒に隣りあって座り、舞台上の出来ごとに互いに腕をくっつけあったり、ことを交わしたり、笑いあったり、じっと動かずに見入ったりしている。但し以前とちがいで、同年齢の子どもだけで仲間になっているのが寂しい。

小学生は「先生」がいないことの解放感を最も表す子どもたちである。児童館の指導員や地域子ども会の世話役の中には、先生より先生らしい、管理に励む人もいるが、多くは子どもと共に楽しむとする気持ちは強い。そうした人たちのいる所では、子どもたちはのびのびしていて、雰囲気は活気がある。充分仲間と遊んでいる子どもたちは、劇の見方も良い。管理され指示されてすごしている子どもたちは、その欲求不満をぶつけるように、いやな見方をする。劇のあら探しのようを見方をしてヤジったり、ことばをかけても素直に

応えない。小学校の五、六年生や中学生の中には、終始冷やかな目で見ている子どももいる。

めつたにないことだが、後味の悪い公演になってしまう。劇は、演じる者と観る者でつくりあげるもの。両者が表現しあうことで、つながりが生れ、劇が一層もり上っていく。また劇に流行のキャラクターやギャグは不要である。その様な劇と無関係の瞬間の刺激に、子どもたちはごまかされない。大きなホールより、子どもの身の丈にあつた程よい空間の中で、暖かく豊かな劇的表現を両者が楽しむ。表すことに臆病になっている子どもたちが、次第に劇に引き込まれて、豊かな表情になつていくのが楽しみだ。

子どもより変わった大人たち

周囲の大人が変わつた、と感じることが多い。子どもをあやせない母親、子どもとことばを交さ



▲人形と踊る小さい子どもたち（平成16年5月 立川市市民祭り）

ない母親が目につく様になった。面倒くさそうに、子どものことばに返事を返さず無視する。子どもが問いかけても顔も見ずに生返事する。また、自分が劇に見入ってしまい、子どもが泣いてもぐずっても、そのまま見続けている。劇を楽しむ子どもの様子を見守る、大人らしい親の態度ではない。また、劇が終るとテレビのチャンネルを切りかえたりスイッチを切るようにすぐ立って、子どもの手をひっぱってさっさと帰るか、他の母親としゃべり出す。子どもは舞台をふりかえり見ている。子どもの体の中にある、ワクワクドキドキしたあとの残り火の様なもの、つまり楽しさや快さやおどろきの余韻に全く気づいていない。子どもにとってそれを母親に伝えることは難しい。母親には子どもの心を察する姿勢がない。こうして子どもは次第に表すことを止め、表情を堅くするのだろうか。

最近は父親の観客も多くなり、お父さんの方が楽しそうに子どもと話したりしている。また、お年寄も結構見に来てくれる。地域の子どもの集りでは、赤ちゃんからお年寄まで幅広い年齢の人々が一緒に座り劇を楽しんでいる。この事だけでも、地域に開かれた催しはすばらしいと思う。

ある児童館でのすばらしい体験

一昨年夏、山梨の南アルプスに近い町の児童館で公演した時のことである。冷房の無い建物で、当日は三十七度の猛暑だった。朝私たちが到着した時、すでに小学生たちが今日の催しの準備をしていた。受けつけ、あいさつ、途中の歌や手あそびを自分たちが率先して受けもつという。劇の中の唯一の舞台装置のトータムポール作りも、全く大人の指示を求めず、積極的だ。劇が始まると、館長さんたちも一緒に床に座り、共に歌い、笑

い、劇に参加し、大いに楽しんでた。この様な機会は大変少ないとのことだったが、子どもたちの見方はすばらしかった。心も体も柔軟に育っている。劇や物語の語るものを、素直にきちつと受けとめて、反応を返してくる。参加劇の「ジャングル族の村祭」では、全員が汗びつしよりになつて、酋長へのプレゼントの槍を新聞紙で作り、踊り、リズムをとり、祭りに参加した。何がこの子どもたちを元気にしているのだろう。周囲の豊かな自然環境は勿論大事だろうが、なによりここに集まってくる大人たち（地域の赤ん坊から年寄まで、皆にこにこ笑顔でやつて来た。深いきずなができてることが感じられた）の子どもを見守る暖かくゆるやかな大きな輪、それは一つの囲いともいえるが、その力ではないか、と思う。気持ちのよい公演、そして人々との出会いだった。

（宝仙学園短期大学名誉教授）

子どもの理解を深めるために

—メラニー・クラインの著書を読んで—

清原 規子

今年、タビストッククリニック（ロンドン）のコースで、メラニー・クラインの理論を学ぶ授業に参加している。この授業から、彼女が、子どもの治療や観察を通して、子どもの心の世界（特に感情的なもの）をできうる限り全人格的に理解していることとされているのを大変興味深く勉強している。今まで学んできた中で私が特に印象深く思ったことを私なりにまとめてみようと思う。

メラニー・クラインのこと

彼女は、一八八二年にウィーンでユダヤ人の夫婦の四人目の子どもとして誕生した。結核の強い家族の中で育つ一方、すぐ上の姉を彼女が四歳の時に、父親を十八歳の時に、そして長兄も二十歳の時に亡くしている。彼女は二十一歳で結婚して三人の子どもをもうけたが、その間ひどく落ち込んで苦しんだ

りもしていた。そんな時に、フロイトが構築した精神分析を知り、学び始めた。彼女は、特に子どもに興味を持ち、直接子どもの治療に重点的に関わるようになった。

クラインの子どもの世界の理解

まず彼女は、子どもは生まれたその時から自分を愛してくれる対象を求めている、ということを書いている。乳幼児はとても繊細で、壊れやすい存在なので愛情を持って世話をしてくれる人が必要であると、いろいろな所で述べている。では、乳幼児はどんなふうに繊細なのか。

ここで少し、エスタービックという人が述べたことを付け加えておきたい。というのは、このあと述べようとしていることは、そこから繋がっていくものと思われるからである。彼女は生まれたばかりの赤ん坊は、言葉どおりにしっかりと抱かれる経験の大

切さを述べている。乳児は、本当に薄いガラスが簡単に割れてしまうようなもろさを持っていて、でもそれらが丸ごと一緒に抱かれることによって、自分を守られている、愛されているという実感の体験を自分の中に取り入れることができ、次第に自分という一つの形を作っていく、それがこの後のクラインの発達へと繋がっていくと示唆している。

クラインは、乳幼児はまずいろんな体験をシンブルに、自分を守ってくれるとてもいいもの（人）と自分に危害やストレスを与えるとても悪いもの（人）に分けていると考えている。それは同じ人や事柄から出てきたものでも、初めの頃は、別のものとしてとらえている。そして次第に、同じ人からその両方の部分が出てきていることを知るようになる。

乳幼児は、生まれた時からこの悪いものに対して、既にいろいろな不安や恐れを持っている。乳幼

児の心の中では、一つ一つの出来事が自分の命を失うか、生き残ることができるかというほどの一大事なことで、この不安もその心の動きにそって非常に大きなものとなっている。それ自体は自分を守る力を育てていくのに必要なものもあるわけだが、その不安や恐れは、この同じ人からいい部分も悪い部分も出ていっていると気づき始めた頃には、大きく分けて次の二つに分けることができるという。

一つ目は、この世の中でとてつもなく悪い者が、自分をやっつけ、破壊しようとしているという不安である。この不安に対しては、自分も同じくらい力を持って、相手をやっつけなければならぬという「目には目を」という気持ちで対抗していこうとする。

二つ目は、前の不安とそれに対抗する「目には目を」の手段に繋がっているものもあるが、自分の愛している人（この頃は多くの場合は母親あるいは

自分の世話をしてくれる人がその対象となると思われるが）を失ってしまうのではないか、悪い者のせいであるいは自分のせいだ、という恐れ、あるいは傷つけてしまったという悲しみである。つまり、現実にはその愛する人は存在するのだけれど、乳幼児の心の中では、そのようなファンタジーが、自分のパワフルな力によってあたかも現実に体験したかのように存在するのである。そして、自分の感情の大きさによって、何度も危機的な状態になっている。

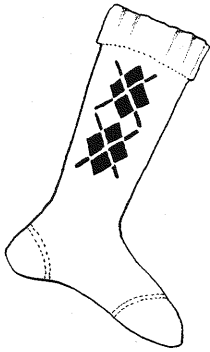
ここで、クラインは再び、この不安は子どもにとって耐え難いくらい大きなものであるからこそ、実際に愛する人が傍にいないことの重要性を述べ、そして、この不安に対して、では子ども自身はどういうに対処していこうとしているかを述べている。

子どもの心のファンタジー

これらの不安が生じてくる時期は、子どもをとて

も不安定な状態に置く一方で、愛する人の助けを借りながらそれに対処する方法を心の中で育て上げていく時期で、このバランス及び、ここをうまく乗り越えていくことが子どもの心の成長に大切なものとなっている。

子どもが愛する人を失ってしまったのではないかという不安と、あるいはその思いに引き続いて、自分としてしまったことに対する自責の念がわきおこつてくると子どもはそれに対抗して、心の中の愛する人を守るため、よみがえらせるために（それは結果的に自分自身を守ることになるわけだが）、いろいろ



るな経験（体験）をしている。特に、子どもはそれらと面と向かっていくだけの力を十分には持ち合わせていないので、いろんな方法を使って、そこを乗り越えていこうとする。

たとえば、愛する人を失ってしまったことに対するの悲しみとそれに対する自責の念に面と向かうのを避けるため、「ふん、別になんとも思わないよ」とか「そんなもの関係ないや」と振舞う時もある。ば、ファンタジーの中で自分がすごく強い人になって、敵をやっつけたり、自分に従うように相手を仕向けさせるように振舞う時もある。また、愛している人を守るために、その人を完全無敵な正義の味方に仕立て上げたりもする。絵本やアニメなどは、これらを表現しているものが多いのは誰もが思いつくことである。

これらの子どものファンタジーの背景には、自分の中には大好きと思う気持ちと大嫌いという気持ち

ち、ほっとできるという気持ちと危ないと思う気持ち、攻撃するという気持ちと悪いことをしたから償いたいという気持ち等をたくさん経験していく中で、それらを一緒に体験してくれる、たとえば母親の存在によつて、自分の生きていく価値の大切さを見出し、つまり、母親が自分を愛してくれたように自分もそんな「愛する」気持ち、よい部分を持つているんだという、人に対しても自分に対しても信頼できる気持ちを構築していくものがあるという。

クラインはこの時期をとても大切なものと考えている。特に、子どもたちが人との関係の中で、自分の中にいろいろな気持ち―それはたとえば、一方で喜ぶ気持ち、他方では怒る気持ち―があることに気づき、そこを支えてくれる人とともに知っていく、前述したように、信頼する気持ちを子どもが育てることができるか、あるいは自分は見捨てられた歓迎されない存在だと絶望感と大きな怒りに浸つてしま

うかを基本的に築く時期だからである。

最後に

彼女の著書では、人間のさまざまな感情をいい面悪い面等、一つ方向からだけでなく、多方面から見ている。読んでいて、かつ、どこまでも追求していつている。読んでいて、乳幼児から始まる人間の心は（もつと言えば胎児の状態からともいえよう）、これほどまでに広く深いものかと、子どもを相手に仕事をしながら実感するばかりである。

（ロンドン在住）

参考文献

『メラニー・クライン著作集3』（誠信書房 一九八三）
第6章 「喪とその躁うつ状態との関係」

葉っぱの力(2)

群馬 直美

初めて絵を描いたのは、いつだったろう？

初めて踊ったのは、いつだったろう？

初めて描いた絵

初めて絵を描いたのは、いつだったろう？

幼稚園の教室。

先生が読んでくれた『ちび黒さんぽ』。

トラがバターになっちゃう話。

「今聞いたお話を絵に描いてみよう」

真っ白な画用紙とクレヨンがでてきた。

何を描いていいのかわからなかった。

わたしの画用紙はずっと真っ白のまま。

隣の男の子は、一心不乱に描いている。

黄色のクレヨン、茶色のクレヨン、

緑色のクレヨン、茶色のクレヨン、

緑色のクレヨン……

そっかあ、こうに描けばいいのさあ。

まねして描いた。したら、先生にほめられた。

みんなの羨望のまなざし。

絵を描けばみんなの輪の中に入っていける！

人気者になれる！

絵を描くのがスキになった。

絵を描くって

祖父母が家にやって来ると、

ちいさな絵描き魂に火が点く。

紙とクレヨンを持って、祖父の前に陣取る。

「なになに。絵を描いてくれるんかい？」

祖父の顔が、嬉しそうにほころぶ。

床にはいつくばって、祖父の顔を見上げる。

見上げては、紙を見る。

見上げては、紙を見る。

ついに、完成！

祖父母、両親、みんな拍手喝采で大喜び。

絵を描くって、スゴイことだ。

こんなに多くの人たちが喜んでくれる。

みんながこんなに幸せになれる！

ますます絵を描くのが、スキになった。

白い紙にタチムカウ大人

いとこの家に預けられていた。

毎週一回、お習字の先生がやって来た。

正座して、白い紙を前に置き、黒い硯で墨をする。

一生懸命、墨をする。

黙々と墨をする。

こんなに何も言わない大人を初めて見た。

こんなに黙々と、

なんだかわからないことに打ち込む大人を

初めて見た。

一挙手一動に心が研ぎ澄まされる。

わたしも正座をし、ピンと背筋を伸ばして、

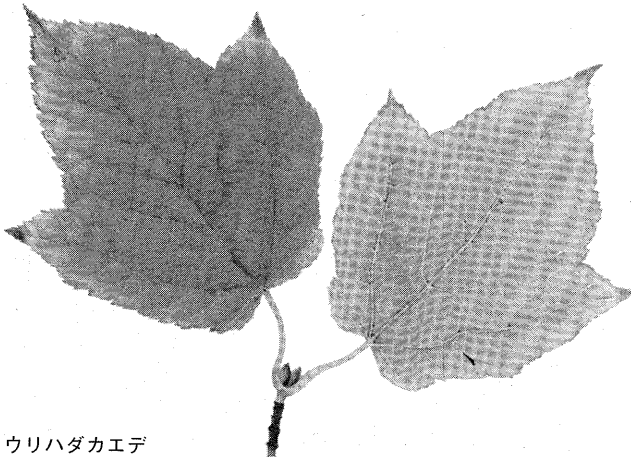
じつと見る。

先生は筆を執り、硯に浸して巧みに穂先を整える。

刀のような穂先で、先生は白い紙に夕チムカウ。

一と書いた。

こんなに時間をかけて一を書く大人を初めて見た。



ウリハダカエデ

「そんなにお習字がスキだったら、やってみるかいい？」

飽きもせず、毎週お習字を見ていたわたしに、ある日、先生が言った。

じつは、やってみたくてウズウズしていた。

わたしは、メキメキ上達した。

五級、四級、三級……とんとん拍子に進級して、あつどいいう間に一級になった……ここで足踏み。

「先生の家の子は、初段になったのにねえ」

書道協会の会報を見ながら、両親がつぶやく。

わたしは普通の家の子だからダメなんだ、

いくらガンバッテモ……

両親のつぶやきの裏側に、

世の中の仕組みを感じとる。

白い紙が真っ黒になった。

真っ黒な紙にタチムカイタクハナイ。

真っ白な紙にタチムカウ大人が、わたしはスキだった。

初めて踊った

幼稚園の学芸会でやった『うらしま太郎』

わたしは、タイやヒラメの舞い踊りのタイの役。

紙に描いたタイのかぶり物。タイ色の衣装。

タイやヒラメに囲まれて、乙姫様が踊る。

乙姫様は、一番背の高い女の子。

学芸会も近づいたある日、乙姫様が風邪でダウン。

困った先生は、二番目に背の高かったわたしに、

「踊ってごらん。いつも見ていたから覚えてるわよ

ね？」

わたしは何も覚えていなかった。

いつも、ぼーっとしていた。

みんなが円陣を組んで座る。
わたしはひとり立ち上がり、円の中に入る。
何をしたのか憶えていない。

だけど、十把一からげ、その他大勢じゃない自分を感じ
てドキドキした。



ハウチワカエデ

みんなに見られていると、
普段とは違う自分に出遭える！
これが本当の自分！の様な気がした。

初めての即興

これまた、幼稚園のとき。

『舌切り雀』の意地悪ばあさんをやった。

心の汚い悪者の役なんかいやだった。

ゴザを敷きつめた講堂で、

先生が意地悪ばあさんの服に着替えさせてくれた。

悪者っぽい、腹黒っぽい色の着物。

帯もきちんと締め、手ぬぐいで頬被り。

着物の襟首には、

縫いつけられたねずみ色の手ぬぐい。

リアルなりトル意地悪ばあさんの一丁上がり。

きれいな色の服がよかったのになあ……

大きなたらいと洗濯板。

ごしごし洗濯する意地悪ばあさん。

場内はどよめいた。

「まあ、カワイイ！」

思いがけない歓声に、嬉しくなった。

雀役の女の子が出てきて、たらいの周りを回る。

銀紙で出来た大きな舌切バサミを持って追いかける。

雀役の女の子が転んでしまった。

どうしよう……

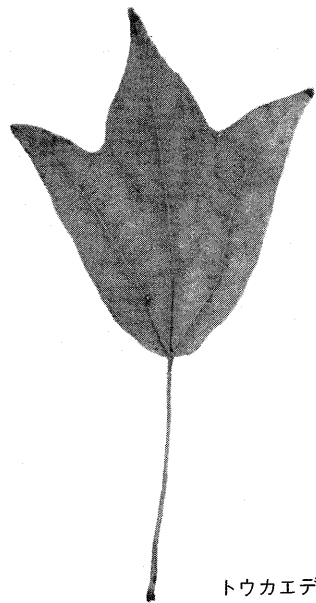
とっさにわたしは天を仰ぎ、

その場で走る振りをした。舌切バサミを振りかざす。

これが生まれて始めてやったアドリブ（即興）。

舞台って面白い！

人に見られていると、



トウカエデ

ほーっとしている自分じゃなくなる。

◇

こんな幼少期の体験や記憶が、今のわたしをかたちづ
くっているようです。

わたしに絵や踊りの才能があったかといえば、全くな
かったと思います。ただ、わたしが絵を描くと、周りの
人たちがとても敏感に反応してくれた。喜んでくれた。

満面の笑みで讃えてくれた。それが嬉しくてわたしは描
いた。

◇

つい先日、障害者のイベントで踊りました。

見ているみんなのお陰で、踊ることができました。わたくしが踊ったというより、その場に居合わせた、ひとりひとりの人たちが踊った、という感覚でした。

パフォーマンスを終えると、ひとりの少年が舞台袖にいました。半ズボンのポケットからゴソゴソと、宝物のようなひと粒のガムを差し出し、

「よくあんなに踊れるね！」

少年は顔を紅潮させて今わたしが踊ったように、自分でもくねくねからだを動かして言うのです。（あら、わたしよりうまい！）そして、舞台袖に落ちていたちいさなピンク色のスパンコールを拾い上げ、わたしの手のひらにそつとのおせてくれました。

オリンピックの金メダルをもらったような気がしました。

イベント会場内に入ると、知的障碍（あるいは自閉症？）の若者たちの何人かと目と目が合いました。非常に哲学的で知的なまなざしの深さです。そのまなざしの奥の奥に、今行った即興ダンスをしつかりと讃えてくれている微かな表情を、わたしは読み取りました。少なくとも、この人たちとはダンスでコミュニケーションできた！これは、どんな賛辞よりも心に残る出来事でした。

ありふれた一枚の葉っぱは、みんなの祝福を浴びて、スクスク育つのです。

（葉画家）

☆イラストは三点とも筆者による。紙／テンペラ

群馬直美『木の葉の美術館』世界文化社、一九九八より転載。

退職園長による子育て塾(5)

ふるさと感

戎 喜久恵

お月見

勤めながらの子育ての中で、忘れられない出来事はたくさんあります。

九月のある日、仕事が遅くまであり少々疲れ気味で家にたどり着いた私は、玄関に懐中電灯を持ち並んで座って、私の帰りを待っている子どもたちに出

会いました。

「今日は、お月見だから……」という娘の声をどのように聞いたかは憶えていませんが、花ばさみをもって子どもたちとススキを採りに出かけました。

「ごめんよ」「ごめんね」といつもの台詞を口にしながら。

月見だんごができあがった頃は中秋の名月は小さ

く天上にありました。

あわただしい子育ての中で子どもの期待を裏切ることとは度々でしたが、このときばかりは胸に応えませんでした。勤めながらの子育てでは日常的に子どもと密につきあうことは出来ませんが、七節句くらいは子どもと一緒にしようと思いに決めていたのです。

私の母は現在九十八歳ですがお正月、ひな祭り、こどもの日、七夕、お月見などの年中行事は丁寧にしています。ひな祭りが来ると母と一緒にお正月に作っておいたあられを出して煎ったこと、火が通つてくると硬いあられの角がふくらんで次第に全体がふくらんでいく様子、ふくらむ音や芳しい匂いなどを懐かしく思い出します。塗り物の遊山箱に巻ずしやようかん、ゆで卵などを詰めて裏山に出かけたこと、友だちと交換して食べたこと、ちよつと後ろめたい気持ちを味わいながら残った巻ずしを転

がして競ったことなど。私の内にふるさと感と共に蘇る懐かしさの感覚を子どもたちが成長したときに持っていてくれることを期待していたのです。

この小さな事件はそれから後の私の子育ての中で「そんな頼りない親でも、子どもは必死で信じようとしているのだよ」と度々思い起こされることとなりました。

お月見だんご

私の子どもの頃は、母がひき臼で餅米を挽くことから始まったお月見だんごも、今ではだんごの粉、上新粉として売られていて、いつでも誰でも簡単に作れるようになっていきます。「にしサター」の子どもたちは「耳たぶくらいの柔らかさにしてね」という赤澤先生の指導で水と粉を練っています。どの子もやりたくて順番を待ちきれません。泥だんごとは違う好奇心が働いているようです。はじめて経験す



▲月見だんごは丸く丸く

る子はボールに両手を入れてうれしそうです。はじめは手にくっつきますが次第に手やボールに付かなくなるが大発見のようです。これは体験してはじめて分かる感覚です。

少しずつ取って丸めていきます。月見だんごは丸いイメージを持っているでしょう。どの子も丸くしています。沸騰した湯に入れて浮かんできたらできあがりです。浮かんだだんごを網杓子ですくい取るのは少々危険な仕事ですが小学生が担当を買って出ます。自分に出来る仕事を見極める力を持つていくことに感心します。その様子を見ていてやれそうと思った幼児が申し出ると小学生は上手にアドバイスをしながらやらせています。

「にじサタデー」が始まった頃は、我が物顔に行動し危険なこともあった小学生たちですが、共に過ごす経験が重なるにつれて年少児をうまくリードするようになってきています。にじサタデーの始まりで

は、参加者を〇歳から三歳の子どもとその保護者としました。しかし、卒業がないことや兄弟が一緒に参加することから今では年齢の幅が大きくなっていますが、昔の原っぱの役割が果たせていい環境になってきています。

たとえば家庭では兄と弟と役割が決まってしまうのですが、ここに来るといつも威張っている兄も、もつと年長者と遊ぶ経験が出来、いつも弟として兄に頭が上がらない子も、もつと小さい子には頼もしいお兄さん役を果します。

はじめてのにじサタデー

九月二十八日。ドキドキしながら尼寺分校の門を入ると、まず私の目に飛び込んできたのが何とも楽しそうに生き生きと遊んでいる子どもたちの姿でした。「ああ、ここはきつと楽しいところなんだろうな」と感じた私の気持ちは娘にも伝わったのか、い



▲「おにいちゃんといこうよ」



▲黙々と丸めて こんなにできました

つもなら初めての場所ですぐにとけ込むことが出来ない子なのにその日はすーっと私のそばを離れ友だちの中に入ってしまったのです。私たち親子の興味をひく遊びがいっぱいあり、特に娘がはまっていたのがおだんご作りでした。「あんなに夢中になれるものなの？」と思うくらい黙々とおだんごを丸めて作る姿は真剣そのもの、大小形は決して見栄えがよいとは言えないけれど、自分も参加して作ったという喜びと満足感からか、おだんごをいっぱい食べてお代りまでしたのには驚きました。ここではどんなに小さくても自分の存在を認めてくれてその子に応じた遊びを心ゆくまで楽しませてもらえる。だから子どもたちも失敗を恐れず何にでも挑戦してがんばれる力が身に付くのだ！と、ここに参加して改めてそう思いました。子どもは遊びの中から物事を考え、吸収し、学んでいくものなんですよね。まだ、たった一回しか参加していないけれど、娘の今まで

見たことのないような楽しい表情とがんばる姿には
私自身が感動し、日頃いかに子どもに対して自分勝
手な接し方しかしてこなかったのか思い知らされ、
子どもの存在を認めてあげなければ……と反省させ
られた次第です。(以下略)

レインボー通信より (まゆママ)

栗ひろい

「今回は栗ひろいに行きます」というお知らせを聞
き、今回私の用意したものは「トング」と「蓋付き
バケツ」。

トングはイガを触ると痛いので挟んで取るよう
に、蓋付きバケツは栗をもって帰るのに痛くないよ
うに。

《いざ山へ》

山へ着くと「栗を入れてね」と配られたビニル
袋。ビニル袋? ヤブレル……と思っていると、栗を

拾った人が足でムギユツとイガを踏み、取り出した
栗をビニル袋の中へ。

ナ、ナント!! なるほど、そうするのか!!

散乱したイガを見て「イノシシが食べたのね」と
先生の声。

イノシシ!! 子どもと顔を見合わせて驚く。

イノシシがここにいるなんて!!

この山に!?! (山にいなければ、どこにいるという
のだ?)

《山のなかへ》

うつすらとした光、ひんやりとした空気。倒れか
かった木。

ジュルジュルとした枯れ葉を踏み、山道を進んで
いくと、二歳の娘は、「ママ、暗い。こわいよ」と
私の腕に抱きつきました。

彼女にとって初めての山は、不思議で不気味な世
界だったようです。

五歳の息子は見たことのない大きな大きなクモの巣、ヘビのような巨大ミミズ、毒キノコ（ほんど？）、クマの足あと（これは人のだろう）、などに心を弾ませ楽しんだようです。

秋の自然の中で心を揺らし、大発見にわいた楽しい時間でした。

レインボー通信より (ママ)

自然の中ではあつという間に時間が過ぎていきます。

イガの中に入ったままの栗をどうして取り出すか。高い枝になっている栗をどうして落とすか。へたをするといがくりが頭上に落ちて痛い目にあいませ。

ここでは親が子に教えるのではなく、経験者が未経験者に教えることになります。

長い竿の扱いは時間とともにうまくなっていきま



▲長い竿を巧みに扱って

す。

「おいしそう。こんなにつやつやしているとは知らなかった。店先の栗しか見たことなかった」と栗ひろいに意欲的な母親たち。今年は小雨の中「大丈夫、大丈夫！」と子どもたちと雨具をつけて出かけました。

この場所で「にじサタデー」を始めようと思ったきっかけは、恵まれた自然があるにもかかわらず、自然から遠のいた生活が当たり前になっていることに疑問を感じていたからです。幼稚園では、それを補うために生活の中に自然を持ちこむことも多くなりましたし、園外保育などでお出かけ自然体験もしますが、大勢が自然の中で過ごすことには限度があります。たまたま自然に恵まれた分校が休校になります。このままではもったいないと思ったのがきっかけです。自然の中では私たちが「○○遊び」や「×

×活動」、「ねらいを込めた環境構成」というものを用意しなくても子どもたちは自然を相手に自分の発達に見あった様々な生活を生み出していきます。田植えが始まると二週間もすると田圃にはまち針の頭ほどのオタマジャクシが泳ぎます。捕まえようと手を入れると水が濁って見つけられません。しばらく待つことを余儀なくされます。今度は水が濁らないように手を入れる工夫がいきます。子どもは失敗しながら考えます。そして成功するまであきらめません。

苦労の後にジワッとこみ上げる力を感じます。こんな経験を大人になったときに「懐かしさとともに蘇るふるさと感」として取り出せるように、心のどこかにしまっておいてくれることを願っているのです。
(神戸女子大学)

思い出を物語る、語りなおす

—TATの物語とその変化の意味—

藤田 宗和

はじめに

大人は子どもに、良い体験、楽しい体験をたくさん与え、将来、子ども時代の良い思い出を残そうとする。結局、そうした体験を子ども時代に持つことが、将来の子どもの幸せにつながると信じているからだ。しかし、良い体験、楽しい体験とは何だろうか。

か。良い思い出、楽しい思い出は、よい体験、楽しい体験から作り出されるのであろうか。

幼少時の体験と現在の思い出

個人的なことで恐縮であるが、私の小さい頃の鮮明な思い出に以下のようなものがある。幼稚園へ入園の日、家の玄関の柱にしがみついて行くのを渋つ

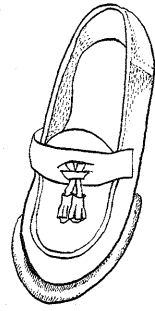
て駄々を捏ねていたら、父親からごつんとやられた時の痛さである。その時のことを思い出すとその痛さまで感じられ、未だに涙が出そうになる。次の思い出は、小学校入学式の時である。子どもたちは新しいランドセルを背負って登校する。当時の小学生は、男子は黒、女子は赤のランドセルが定番であった。父は、何を思ったのか緑のランドセルを買ってくれた。教室の後ろの棚に、黒のランドセルが並んでいる中で、自分の緑のランドセルだけがぼつんとある光景が鮮明に目に浮かぶ。私はそれが嫌でならなかった。

なお、これらの思い出は、今では次のような思いに連なる。登園の時の思い出については、結局泣きながらも登園し、その後何事もなく幼稚園になじんだ。今考えると、もしそのとき駄々を捏ねたまま登園しなければ、いわゆる分離不安型の不登園になっていたかもしれない。そんな言葉は知らなかったで

あろうが、口下手な父は息子を思い、思わず手を出したのだろう。それを未然に防いでくれた父親には感謝しなくてはという思いである。入学式の思い出については、今になって考えると、子どもに少しでも良い物を与えたいという親心から、ハイカラで良かれと思つて買ってくれたのだという思いである。

これらの思い出は、すぐに思い出すくらいであるから、その出来事に対する体験が強烈であつたということがある。そして、これらの思い出に共通する特徴は、痛み、色という感覚・知覚的な体験的記憶がもとにあり、また当時としては良い体験、楽しい体験ではなく、むしろ辛い体験であつたということである。

しかし、次第にその体験を嫌なものとして感じることはなくなつた。むしろ、現在はその体験の良い思い出として自分の中で受け入れている、あるいは受け入れようとしている。なお、これらの思い出の



詳細が事実かどうかはわからない。時折思い出し、時たま人に語る中で、実際には状況の詳細はデフォルメされているはずだ。記憶は嘘をつく、つまり、作られるとの研究もある。しかし、思い出とそれに連なる感覚、感情は確かに「今」の私の中に存在している。だが、その体験に連なる思いは、繰り返し思い出し、語る中で昔とかなり変化している。

皆さんも子ども時代の心に残る体験的記憶があるはずだ。その体験的記憶には、何らかの感覚や感情が伴っていることが多い。こうしたある出来事にまつわる思い出しは、エピソード記憶といわれるものである。その出来事に強烈なショックが伴い、その記憶が長期にわたる不適応の原因となっているもの

は、いわゆる心的外傷（トラウマ）と呼ばれる。私の場合には当然そこまでは至っていない。むしろ辛い体験でしかなかったものが、長ずるに連れて次第にその時の親心をその体験に重ね合わせることでできるようになり、今では良い思い出として語ることができるようになったのである。体験は変わらないが、思い出しは語りなおすことができるのである。

思い出を物語るテスト

どうしてこのような話をしたかというところ、私の専門は、犯罪・非行と投影法と呼ばれる心理テストであるからである。投影法には、ロールシャット・テスト、TAT（主題統覚法）、バウム・テスト、家族画などがある。ロールシャット・テストはインクのシミを垂らしたようなカードを見せ、何に見えるかを問うもので、TATは人物の描かれているカードを見て、短い物語を作るよう求めるもので

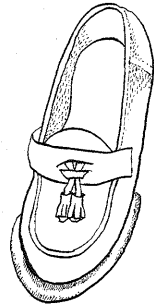
ある。バウム・テストは一本の木を描かせるもので、家族画は家族で何かやっているところを思い描かせるものである。

いずれにせよ、被験者は何を調べられているか判らない問いを与えられ、正解のない答え（反応）をしなければならぬ。その反応には、被験者の内面の心理（無意識な認知の構え、コンプレックスなど）が反映されており、反応を分析することで被験者の心性が打診できると仮定されているので、精神医学、臨床心理学において、被験者（クライエント）の知覚、認知、感情、対人的な構えの特徴や背景にあるコンプレックス等を打診するために用いられている。

特に興味を持って研究しているものは、TATである。TATはある意味で、思い出を物語ってもらうテストである。カード（ハーバード版TAT図版）に描かれている絵は、二十世紀はじめの欧米の

風俗を髣髴とさせる人物が多く、白黒で暗い印象を与えるものである。それを見て、自由に想像して物語を作ってもらうのである。そのような絵を見て作られた物語は、一見荒唐無稽な思いつきでありそうである。しかし、その物語の素材が何も無いところから出てくるわけではない。被験者自身の内面にある記憶、思い出がその出所となり、それを利用、加工して物語が作られる。被験者にその出所を聞くと、物語の素材はつい最近の出来事、映画や小説から思いついたと言うかもしれない。また昔の思い出から題材をとったと言うかもしれない。あるいは、何も考えず、思いついたと言うかもしれない。しかし、同一被験者のいくつかの物語に共通する主題や感情のトーンには、その人の人生の主題や支配的な感情のトーンが現れることが多い。その共通特徴を抽出して、被験者の人格、人間関係を打診し、診断や援助に利用するのである。

事例から



残虐な対人非行を犯したある少年を面接した時のことである。彼は頑なで、面接時も口数が少なく、事件については自分が被害者であると受け取り、家族についても拒否的で、自分を見つめようとする姿勢は見られなかった。周囲からの情報では、彼は幼少時から過干渉で威圧的な両親に厳しくしつけられたとのことである。少しでも親の意に添わないことをすると、彼は親に注意され、よく叩かれたようだ。その結果、幼少時から強迫神経症的な行動を表出させている。長ずるに連れて、彼は動物虐待を始め、また家庭内暴力を発展させ、最終的には他人へ

攻撃を向けたのである。

そこで、内面を探るためにTATを実施したところ、葛藤に満ちた冷たい対人関係を中心とした物語を語った。特に物語の女性像は支配的で冷淡であり、これでもかというくらい女性を悪人に仕立てていた。他の物語も基本的に対立的で、強制—服従という人間関係が多く、結末も裏切りなど不幸な内容であった。これらをもとに、面接中に早期回想をさせると、彼の幼少時の思い出は、母親から床に落とした食べ物をもつたいないと、無理矢理食べさせられた時の味であった。その思い出は、感覚レベルの体験にとどまっていた。これらの結果は、彼は立ち直るためには長期間の指導・援助が必要であることを予想させた。

なお、親から丹念に話を聞くうちに、今までのいろいろな彼の不始末を親がすべて経済的に処理していたことが判ってきた。実際に親がどれだけ彼の後

始末に奔走したかの事実を、彼とともにきちんと確認していく中で、彼自身もそうした事実を受け入れ始めた。依然として彼は親には拒否的で攻撃的であったが、その中で、ほんの少しであるが彼はうつむき、涙ぐむ行動も見られた。

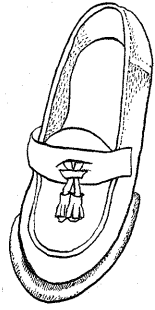
このケースの場合、長期間の援助的な面接を行うことはできなかったが、実際、彼の立ち直りには長い道程が必要であったようだ。それなりに立ち直った後に実施したTATにおいては、協力的、援助的な人間関係の物語を語れるようになったという。このときは、彼は筆者の手を離れ、実際には聞けなかったが、また幼少時の食べ物の思い出を聞いてみたいと思った。無理矢理食べさせられた食べ物の味の感覚体験は変わることはないだろう。だが、立ち直った後は、そのときの親の気持ちを肯定的に受け止める思いを付加した思い出として語りなおしてくれるのではないかと思うし、それを期待したい。彼

が変われば、その出来事について思い出も変わるだろうし、また思い出が変われば、彼自身も変わっていきはるが、（なお、この事例はいくつかのケースを重ね合わせたものである）。

子どもの体験と思い出

話を最初の問いかけに戻そう。大人は子どもに、良い体験、楽しい体験をたくさん作ってやろうとする。このこと自体に異論はない。しかし、大人の思案どおりに子どもにとつて、それが良い体験、楽しい体験であるとは限らない。むしろ、良かれと思つて行ったことが、その時の子どもには逆の辛い体験となる可能性もあるといえる。また、大人は子どもにいつも良い体験、楽しい体験を与えることができるとは限らない。むしろ、感情的になつて、子どもに辛い体験を与えることもままあるはずだ。

しかし、ある出来事の強烈な体験は変えられない



かもしれないが、それにまつわる思い出は変わるし、変えることができるのである。思い出が変わるためには、子どもの成長や周りの大人の日常的な働きかけが積み重ねることが必要である。その結果、徐々にその体験にいろいろな思いや感情がまわりつき、新たに語りなおされた思い出として語られるといえる。

非行少年や悩みを抱えている人の援助は、この視点から見れば、まずその人の物語、すなわち重要な思い出を理解し、本人が語れなければ代わりに語ってやることである。また、その物語を、つまり大切な思い出として語りなおすことができるよう手伝いをすることといえる。大人の子どもへの働きかけも

同様である。いろいろな良い、楽しい体験を子どもに与えることも大切であるが、たまたま辛い体験を子どもに与えてしまっても心配することはない。その体験を将来良い物語として、つまり大切な思い出として語りなおすための日常的な働きかけがあれば、その体験は逆にその人にとって宝物としての思い出、物語となるのではないだろうか。

(お茶の水女子大学)

参考文献

Loftus, E., & Ketcham, K. 1994. *The Myth of repressed memory: False memories and allegations of sexual abuse.* St. Martin's Press.

安香宏・藤田宗和編 『臨床事例から学ぶTAT解釈の実際』新曜社 一九九四



障害をもつ幼児の保育(25)

—この子と出会ったとき—

津守 真 (M)

津守 房江 (F)

水が大好きな子の『お魚物語』

『お魚物語』のはじまり

F 私が忘れられない金魚についての子どもの情景
があるのですが……。

弥富^{ヤトミ}というところにある保育園を訪ねたときのこ

と、バケツに入れて流しの近くにおいてある金魚を、三歳の男の子が全く無造作に手で掴んで高いところに置いてある立派な水槽に“ひよい”と入れたのです。下のバケツには小さな金魚が入れてあつて、上の水槽には上等の金魚が泳いでいる。その中

に小さな金魚を背伸びして殆ど投げ入れるようにしたその姿に、驚きました。

M うちでは金魚はとても大切にして病気になる薬を塗ったり、死ぬとお墓をつくったからね。お魚は子どもと同様に、か弱い『命』そのもの思ってた。

F ええ。それでその子を注目して見ていると、トースターの中におもちゃを入れたりする「いろいろ」遊びが多いのです。

その子はおばあちゃんに連れられてお姉ちゃんの送り迎えに毎日ついて来ていた。この日はこの男の子がやっと憧れの保育園に入園して二日目だったそうです。

M ああ、それで「いれる」遊びをしたのかな。

F 後で分かったことですが、このあたりは金魚の生産地で、この子のうちも金魚を生産している家だそうです。

小さいバケツから大きな立派な水槽に、手でくって金魚を移したのは、自分が保育園に入園して嬉しかったように金魚も入れてやろうとしたのでしょうね。

自分のことをお魚だと思っているのか

F その保育のビデオを見ながら、私はこんなに命を粗末にしているのかと思っていました。保育者の正義感みたいなものが胸に沸き上がってきていました。今考えると私の見方が浅くてお恥ずかしいのですが……。

M 大人の正義感のことはちょっとわきに置いておいて（笑い）。

私は今の話を聞いてひとりの子どものことを考えました。以前にも話したことがあるかもしれないけれど、川の流れが大好きで学校に来る前に公園の池の橋からずーっと水を見ていた男の子のことで

す。それで、学校にはなかなか到着しません。でも担任はじめみんなが待っていました。それがだんだん遅くなって、学校が終わるころから夕方に登校するようにになりました。学校に來ない日もあります。東京タワーでお魚の水槽を見て時間がかかってしまうこともありました。来ればトランポリンを飛んだり楽しく遊んで帰るのですが。

F この子にとっては自分のペースで水の流れのように、自由に伸びやかに生きていますね。もしかししたら、自分のことをお魚と同一化しているのかしら。

M そう、そう。トランポリンを飛ぶとき両手を合わせてくねくねと左右に揺らすんです。はじめ私には何をしているのか分からなくて、この子は私に一生懸命話をしていると注意されたんです。よく見るとその手は魚の尾鰭のように見えるんです。

F 私共の家の子ども一人も、水が好きで学校で

想像の世界を描くことがあったとき、水の中の世界を描きました。その絵は女の子が水槽の中にきれいなひらひらした赤い服を着て座っているのです。水槽の中には小石が敷き詰めてあってそれが一粒ずつ丁寧に描かれていて、現実感を感じさせるのです。

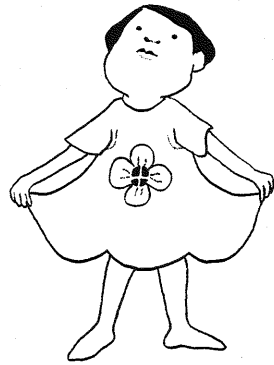
M ああ、あの絵は私も覚えてるよ。子どもの中には水の自由さと自然さを生きている子どももいる。

F つまり、お魚と共感するものがあるんですね。その程度は個人によって違いがあるでしょうけれど。

大きなお魚が欲しい。

でもすぐには手に入らない

M 養護学校の子どもに話を戻すと、ある日、母親や担任の先生からこの子が促されるようにして、私に頼んできたのは大きな細長いお魚を買って欲しい



ということなんです。それが何百万円もするとい
うことなので先生たちも困って津守先生に聞いてみ
ようということになったのです。

私も困ってその子に「困ったなあ、欲しいよなあ」
と言って一緒に困っていました。私がなんと応える
か、職員たちが私を見つめているのが分かりまし
た。

F ああ、そこが大事なですね。すぐに手に入る
とはかぎらない。でも欲しい気持ちは分かる、何と
かしてあげたいけれどできないということを伝える

のですね。

M 丁度その週、岐阜の中部学院大学の先生と話
しているとき、子どもがお魚を欲しがっている話に
なったのです。その先生も弥富での研究会に来てい
たので、とうとう金魚屋さんから宅急便で送つても
らえることに話がついたんです。

もちろんそんなに高価じゃあないけれど、それで
もうちでは買ったことのないような十分立派な金魚
でした。

F それでうちの古い水槽をきれいにして小石も
洗って運んでつたんですね。子どもはどうなりまし
た？

大人が子どもの願いにそうように

動き出しただけで変わった

M 実際に金魚が来るまでにはちよつと時間がか
かったけれど、子どもはもうじき金魚がくると聞い

た次の日から毎日学校に来るようになりました。

F そうそう、T君が何時に登校したというのを、あなたが帰ってくると一番に教えてくれるので私も楽しみでした。こちらが何とかして子どもの願いに応えようとしただけで状況が変わるのですね。

M 水槽に手を入れ、金魚を手にとってスキンシップを楽しんだので、弱ってくるのは早かったです。

F お魚はスキンシップを楽しむのには向いていないですね。以前のように私が「命を大事にしないではいけない」という正義感で子どもを見るだけでは、この子の心を生かすことは出来ないことがよく分かりました。

M 母子はその後、お魚やさんで大きな鯛を買って学校に来るようになりました。それを学校の庭で火を起こして塩焼きにしました。夕方お魚を焼く匂いが流れるのは、何とも言えない生活感があっていいものですよ。

F みんなで食べたのですか。

M ええ、先生たちも集まって来ておいしく賑やかに食べました。

『お魚物語』のおわり・

とびきりの笑顔の毎日

M この子は火を起こしてお魚を焼く手順や実際を全部知っています。このごろはお魚ではなく焼き鳥をしたり、だんだん変わってきているようです。

F 大人の疲労とか、いろいろ考えなければならぬことはあると思いますが、子どもは成長とともに変わるでしょうし、必要な今というときに、みんながひとりの子どもの願いに応えようとして一生懸命になることは素敵なことですね。

子どもがにこにこして毎日学校にやってくるとう話を聞くと、そのことが親たちと先生たちへの子どもからのプレゼントだと思えます。

話したくなるとき

渡邊 満美

小学校の健康診断に向かう。

どんな子どもとどんな出会いをするだろう……。

ほんの数分の出会い。しかし、ここで話すことが子どもたちにどんな影響があるのだろう……と思うと

「気を引き締めて！」と自分に言い聞かせ幼稚園を出た。

私が小学校へ向かい、今から出会う子どもたちは

健康診断の中に組み込まれている『健康相談』という時間に養護教諭として出会う子どもたち。この『健康相談』という時間は、健康診断の振り返りを子ども一人ひとりと先生で一緒に行う時間。小学校では六年生がこの『健康相談』の対象となつている。学校に通うことのできる健康な子どもたちであるため、大病を抱えている子どもはほとんどいない。とくべつ異常のない子どもたち。しかし、そん

な子どもたちも、この数年で背が大きくなったり、体重が増えたりと成長をしている。五センチメートルも背が伸びたこと、去年と比べ歯を治療して虫歯がなくなったこと、この六年ずっと虫歯がなく生活していること、など……。ほんのちよつとしたことだが、ほめられることを喜ばない子どもはいない。そのことを伝えるだけで嬉しい表情をする。健康であることをあたりまえなものではなく、喜んでいいこと、自分の努力も入っていることなどを伝える。この時間は、ほんのちよつと自分の健康・生活を振り返る時間。

子どもたちは健康診断の結果と一枚のシートをもち、それぞれの先生の所に行く。このシートにはいくつか質問が書かれている。健康診断を振り返ると書き込むことができる。小学校では歯科のことを中心に質問が書かれている。その質問項目の中に「こころのじょうたいは？」という項目がある。それは

心身ともに健康かを振り返る質問でもあり、自分のこころの状態を自分で振り返る。

もうほとんどの子どもが終わり、待っている子どもたちがそれぞれの列に数人になってきた。私もちよつと疲れてきていた。

男の子の集団（五、六人）が私の列に並んでいた。並んでいたと言うより団子になっていた。その集団のひとりが順番になり、私の前に座った。すると子どもたちが団子状態のまま椅子ごと近寄ってきた。私も疲れていたのだが、待っていることに子どもたちも疲れたのだろう。私がおの子どもと話しているのを後ろで聞いている。歯肉の腫れの話し、汚れの話を一緒になつて聞いている。プライバシーのことも気になりながら前に座っている子どもも、後ろの子どもも興味深く聞く様子からこのまま続けてしまった。次の子どもの番に後ろに下がるよう伝え

た。しかし、いつの間にか一緒に聞いていた。近づいた。しかし、私は後ろに下がるように伝えた。しかし、四人目の子どもの番も同じ状態で続いた。「こころのじょうたいは？」という欄に(△)印がついていた。

「さんかくね。なにか気になることあったかな」

と聞くと頷いた。しかし、後ろを振りかえって残りの友達を見て、言葉がでないようだった。すると女の子は、

「だいじょうぶ」

その言葉で話を切られてしまった。私は後ろ髪を引かれる思いで次の子どもと出会った。終了後、小学校の養護の先生に伝えた。すると「担任と一緒に健康相談の場にいるから伝えてあげて」と。そこで、少しその時の状態を話した。すると担任は、

「なにか抱えているのは感じていたんです。でも見えていなくて……」

そして、続けた。

「でも、良かった。少し見えましたが。本人はこの場で、私が相談しているのも分かっていて。しかし、私のところには並ばない。そして小学校の養護の先生のところにも。それって他の

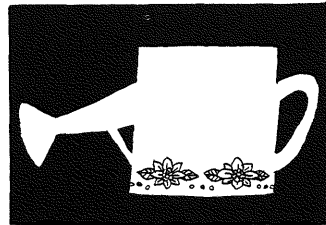
誰かがいいのかも。そういう人になら言いたかったのかもしれない。話したいという気持ちはあったみたい。少し声をかけてみようかな」

私は申し訳ない気持ちでいっばいだった。

「私がもう少し、まわりの子どもものことも気にしていたら……。よろしくお願いします」

と言って幼稚園に戻った。

私がある場で聞くことができても、何か変わるも



のでも、できるものでもない。ただ、話そうと思っ
たかもしれない思いを私がこわしてしまった。大切
なことは、このことをまわりの大人が知って繋げて
おくことだとは思ふ。これからの生活に関わる小学
校の先生が知っていることが大切だと。しかし、そ
の子にとってはたった一つの伝えるチャンスで、伝
えたいタイミングだったのかもしれない。ほんの少
しの出会いを甘く見ていたのは私だったことに気づ
かされてしまった。

その後、中学校・高校の健康相談へと出向いた。
ほんの数分の出会いだが、そのとき・その子の声を
聞くように「氣を引き締めて！」と自分に言い聞か
せた。

*

H子が保健室の入口からずっと私をみて、私を見
たまま近くのソファアまでやってきた。私もH子が

ら目をそらすことができなかつた。H子の目から
は、今にも大粒の涙が出そうにみえた。

「ショックなことがあったの」

私に向かつて話しはじめた。私の前で一緒に聞いて
いたY子が、

「どうしたの」とH子に近寄つた。入ってきた様子
をみて、私は少し近くに寄ろうと思つた。しかし、
私の手前のソファアで座り、私の近くに寄らないH
子から私を近くに寄せたくないというものを感じて
いた。しかし、H子の「ショックなことがあった
の」という言葉。寄せたくないというより、頑張つ
ているという感じだったのであろう。しかし、H子の
言葉で近寄つたY子。私はそのY子とH子のやりと
りを見守りたいと思つた。ここでふたりは何かを感
じるだろうと何となく思つた（その何かは分からな
かつた）。その思いは私の動きに反映したようだ。
いつもの私だつたらH子の様子を見てすぐ近寄つて

いただろう。しかし、Y子の言った言葉・行動によつて私はその場を動かずにいた。そしてY子はもう一度

「どうしたの」

H子は「ちょっと耳を寄せて」

Y子が耳を寄せるとH子はすぐさまこちらを見て

「まみ先生には言わない」

私の動きを感じたのではないだろうか。私がH子だけに気持ちよさを寄せていないことを……。H子をまるごと受けとめるのではなく、H子が友だちとどう乗り越えるかを支えたいと思った私の思いを。H子の言葉に私は何もこたえず、私は耳を寄せたY子とH子のやりとりを見ていた。

「……（何か言っている）」

遠くて聞こえなかった。聞こえない距離ではないが、意識的に聞くこともやめていた。Y子から何の反応もなかった。Y子は聞こえなかったのだろうか

……。何の反応もないY子に私はちょっととまどつた。ここでY子に「なんて言つた」と聞くべきか、それともH子に「先生にも教えて」と言うべきか……。私はどちらの言葉も言わないがH子に顔を近づけた。

「言わない」

しかし、先ほどの言い方とは違って「聞いてもいいよ」という声が聞こえたような気がした。そしてまたY子の耳の近くで言う。さつきより少し大きな声で。しかもH子はこちらを向いて話していた。それでも、私にははっきり聞こえなかった。Y子には聞こえたはず……。反応がなかった。なぜ、Y子は何も言わないのだろうか……。私は自分がH子に声をかけることを迷っていた。Y子とのやりとりの中でH子がつらかったことをY子に分かつてもらえる方がいい。これからつらかったことを友だちに伝えることも出来るという経験のためにもこの関係を大切に

したいと考えていた。でもあまりにも反応のないY子の様子、今日のH子の様子から、これ以上ふたりだけにしておいてはいけないと思った。私はさらに顔を近づけて、

「な〜に」

今度は、言葉で拒まなかったが一瞬身をひく態度をとった。しかし、表情は少し笑って（嬉しそうに）見えた。Y子の耳のそばでH子が話しはじめた。私が顔を近づけるとH子も近づいてきて、声もよく聞こえた。

「私も棒であそぶのやりたかったの」

そこでH子の顔を見るともう涙がこぼれていた。我慢しているのがよく分かった。しかし、すぐに涙をとめていた。気持ちがあふれてしまい流した涙を自分でとめていた……。

「もう少し（もうお帰りのお片づけの時間だった）、あそびたかったのね」

と言葉をくり返し、H子を見た。すると、H子の横に移動したY子が、

「砂場で私がやっていただけなの？（棒たおしのような動きをして言った）」

H子は「そう」とこたえた。

いつのまにか、Y子の姿はなくなっていた。ちよつとするとH子が、

「私ねシヨックなことがあると保健室に来るの」

「そうだったのね」と私はこたえた。

少し間をおいて、H子に、

「私もシヨックなことがあったらH子ちゃんのところに行ってもいい」と聞くと、

「だ〜め、先生は池のくみに行くの」

H子の照れ隠しだったようにも思えた（そう私が思いたかったのかもしれない）。でも、H子の顔が晴れ晴れしているのは確かだった。少しは気持ちの立て直しが出来たのではないだろうか。そんなやりと

りの後、お帰りだという声が廊下の方からも響いてきた。

「さあ、お部屋に戻ろうか」

H子は入ってきた時とは違う表情で部屋に戻った。

ふたりの関わりの中で私は待ちきれずに、自分でも話し、分かってほしいし、何か言ってほしいのは……と思っていた。Y子が何もこたえずにいることが、耐えられないのではないだろうか……と考えていた。しかし、私がしたことはY子とかわらないことのような気がした。

H子との関わりのなかでY子の気持ちも気になっていた。Y子がH子に何も言わなかった理由を考えていた。Y子はH子がもう少し遊びたかったことに気づき、その遊びを自分はやってきっていた。しかし、H子は出来なくてそれをやりたかったといっ

悲しんでいる。そのことを受けとめていたからY子は「そうだったんだ」ということも「私はやった」ということもできずにいて、何の反応も言葉も出なかったのかもしれない。そして、いつの間にかその場から姿を消していた。本当はそんなY子こそ、受けとめ関わりなくてはいけなかったのかもしれない。

*

幼稚園の養護教諭になって、「保健室にはどんな子どもたちが来るの?」といつも聞かれる。子どもたちと生活している私にとって、どんな校種でも保健室に来る子どもはそんなに大きく変わらないと思える。もちろん持ち込んでくる内容に大きな差はあるかもしれない。しかし、子どもになってみれば経験の差が違うのだから、今の子にとっては抱えている大きさは同じなのだと感じている。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

はれ!

ときどき
その⑥ * さとうひろこ *

自分で決める

ちよつと気温が高いな〜と思う日、幼稚園の砂場は、季節に関係なく、決まって水浸しになる。砂場大好きな子どもは大勢いるが、中でもSちゃんの砂場好きは、群を抜いている。

靴下も靴も履いたままで、どろんこの砂場に入る。靴下が足の皮膚に貼り付いて、靴の中に泥水がたまり、いい加減気持ちが悪くなるまでは、絶対に裸足にならない。やつと裸足になると気持ち解放されるのか、表情が和らぎ、動きも大胆になる。

Sちゃんが砂場に入る前に、「先に靴と靴下脱いじゃうのは、どうかなく?」と優しく言ってみる。返事は予想通り、

「やだっ!」

やっぱりそうだろう。そこで翌日は、ちよつと厳しい口

調で、

「今日は脱いであそびなさい!」
すると、あつさり、

「はい」と返事をし、そろえて脱いだ靴の中に丁寧に靴下を詰め込んだ。拍子抜けしたのと同時に、Sちゃんのこだわりが少しわかったような気がした。

この人は、こうして自分の感覚の伴わないところで、ものごとを決められたり判断されたりすることが多いのだろう。

どろんこの靴下と靴の感触。

「もう脱ぐぞ!」と決心し裸足になったときの気持ちよさ。気持ちと一つになったときの、しなやかに動くからだの感覚。

自分で感じて考えて、

「自分で決めたい!」というSちゃんの思いが、ひしひしと伝わってきた。
(幼稚園勤務)



九月、日本では長い夏休みが終わり、子どもは一回り大きくなって、集団生活の日常に戻ろうとする頃でしょう。欧米では新学期が始まります。戎先生の記事を読み、今年こそお月見だんごは家で作ろうと決心しました。

今月号のために寄せられた原稿の、まだ「生」のものを拝見していて、印刷された本誌を読むのとは違う印象がありました。手書きのもの、修正のはいったもの、ワープロの打ち違いの残るものなど、その生き生きしさには重圧すら感じております。原稿と印刷されたものとの違いとは何なのか、その違いを編み上げるのが編集者なのでしょうか。

これまで九年の間、その辺りのことで苦心してこられた田代和美先生が、このたび職場を変えられるの

を機に編集主幹の役をお引きになりました。この場を借りまして心より慰労と感謝の気持ちをお送りしたいと思います。

尚このたび、及ばずながら私がその任を引き継ぐことになりました。田代先生をはじめ、その前に主幹であられた津守真先生と本田和子先生は学生時代以来の恩師であり、さかのぼって倉橋惣三先生、初代の中村五六先生のお名前まで想起してしまうと、正直なところ逃げ出したいような気持ちです。しかしこの雑誌の小さい灯を消してはならないという思いで、これからもお茶の水女子大学附属幼稚園の先生方、そして河合聡子と力を合わせて一步一步手探りで努力してまいります。今後とも読者の皆様の一層のご支援をよろしくお願いいたします。(浜口順子)

幼児の教育

第一〇三巻 第九号

(二〇〇四年九月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十六年九月一日

編集兼発行人 浜口順子

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二二一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五二二一

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一一四一九

☎〇三三三九五六六一三(営業)

☎〇三三三九五六六〇四(編集)

振替 〇〇一九〇一一一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所「フレーベル館」にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

行事別保育のアイデアシリーズ

日々の保育にうるおいと心地よい緊張感を与えてくれる
「園行事」のアイデアを豊富に紹介する新実技シリーズ

好評発売中

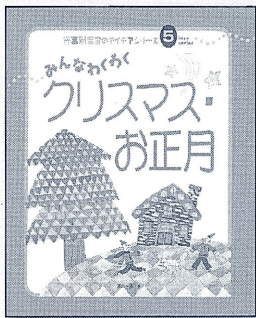


行事別保育のアイデアシリーズ④ みんなでつくろう 発表会

花輪 充 著

日常の保育を発表会へと発展させていくためのユニークな脚本集。簡単なリズム遊びからミュージカルやオペレッタまで、子どもたちがふだんの遊びの延長で取り組むことができ、発表会が魅力いっぱいものになります。『発表会まで』と『発表会では』のアドバイスと楽譜を多数収録。

AB判 96頁 定価 2,310円 (税込)



行事別保育のアイデアシリーズ⑤ みんなわくわく クリスマス・お正月

島本一男 著

子どもが楽しみにしている行事、クリスマスとお正月をどのようにして保育の中に生かしていったらよいのか。本書は、子どもと一緒に作る製作物のアイデアやパーティーでのゲーム・出し物のアイデア、遊び歌などの事例を多数紹介しています。新しいクリスマス、お正月のヒント集です。

AB判 96頁 定価 2,310円 (税込)

【既刊】 好評発売中！



やまもとかつひこ監修/
関西あそび工房著
AB判 96頁
定価 2,310円 (税込)

行事別保育のアイデアシリーズ①
元気がいっぱい
夏期保育



ワークショップりんごの木著
AB判 96頁
定価 2,310円 (税込)

行事別保育のアイデアシリーズ②
みんなにこにこ
運動会



小林紀子編著
AB判 96頁
定価 2,310円 (税込)

行事別保育のアイデアシリーズ③
心を伝える
入園式・卒園式

キンダーブックの
フレール館

いつもの保育をパワーアップする、リーズナブルなミニブックシリーズ!

最新刊

パワーアップ保育SERIES

ともだちたくさんできるよ!

生きる力を育む しぜんあそび・なかまあそび



森 良 著

五感をたっぷり使って自然の不思議さを見出し、自然となかよしになれる“しぜんあそび”と、自分や他人の良さを認め、豊かなコミュニケーション能力を育む“なかまあそび”を多数紹介。

17cm×18cm 48頁 定価998円(税込)

【既刊】好評発売中!



田中世津子 著
17cm×18cm 48頁
定価998円(税込)

10分で作って60分あそべる
カンタンぱわふるおもちゃ 1



田中世津子 著
17cm×18cm 48頁
定価998円(税込)

10分で作って60分あそべる
カンタンぱわふるおもちゃ 2



斎藤二三子 著
17cm×18cm 48頁
定価998円(税込)

10分で作って60分あそべる
ぼっかぽか手遊び・指遊び・ハンカチ遊び



木村実咲 著
17cm×18cm 48頁
定価998円(税込)

0・1・2歳児
あそびとおもちゃ

キンダーブックの **フレール館**

以下続刊